

Contents

特集：イラク情勢に対する断片的な印象 1p

< From the Editor > 「故郷の風景」 8p

特集：イラク情勢に対する断片的な印象

あけましておめでとうございます。

本来は1月17日まで本誌をお休みしようと思っておりましたが、ふと「これだけは書いておこう」と思い立ったことがありますので、ごく短い文章をお届けします。

本年もよろしく願いいたします。

カウントダウン始まる？

欧州市場の金現物価格は一時、オンス当たり356.50ドルと1997年3月以来の高値を付けた。8日のニューヨーク市場終値は、同353.80 / 354.55ドル。米主導による対イラク攻撃懸念を背景に、「安全への逃避先」として金を買われたことで、ほぼ6年ぶりの高値を付けたようだ。実際、原油価格の上昇やドル安も金買いの有力な理由だが、その原油高とドル安をもたらしているのも「イラク攻撃への懸念」である。

1月9日は、国連安全保障理事会において、国連監視検証査察委員会（UNMOVIC）のブリクス委員長から中間報告が行われた。同委員長はこれに先立って記者団に対し、「Smoking Gunは発見していない」と述べた。つまり、現段階では大量破壊兵器開発の決定的な証拠は見つかっていない。

今月27日には、査察状況に関する初の本格的な報告が行われる。昨年末の号でも書いた通り、国際官僚たるブリクス委員長の立場になってみれば、「シロ」と書きにくいと同じくらい「クロ」とも書きにくい。「さらに時間をかけて精査が必要」といった玉虫色の結論になるだろうというのが筆者の読み。この点について、ブリクス委員長は「（11月に採択された）安保理決議は査察終了の期限を設定していない」として、査察作業の継続を強調したそう。やっぱり、である。

おそらく現時点のマーケットのコンセンサスはこんな感じだろう。

1月27日（月） ブリクス報告（イラクの国連決議違反を宣告）
1月28日（火） ブッシュ大統領が一般教書演説（事実上の宣戦布告）
2月 1日（土） 空爆開始（この日は新月）
2月中 地上戦開始

たしかに米国では「出征風景」がテレビで報道されるなど、戦時色が高まっている。年初にはボルチモア港から、軍の医療スタッフを乗せて中東に派遣される病院船が出航し、その風景が日本でも報道された。

しかし本日時点でホワイトハウスのホームページを見ると、フロントページのほとんどが経済など内政問題で占められている。こういうことはめずらしい。

Today at the White House, Jan. 9, 2003

- Growth and Jobs Package Will Help Employees and Small Business
- President Bush Celebrates First Anniversary of No Child Left Behind
- President Bush Taking Action to Strengthen America's Economy
- Who Benefits Under the President's Growth and Jobs Plan?
- The President's Plan Will Help Unemployed Americans Find Work

もしもブッシュ政権が「1月末開戦」を志向しているのなら、ブリクス報告を覆して突き進む必要がある。それにしては、このホワイトハウスのムードはいったい何だろう。イラクでの武力行使のタイミングは、一般に思われているより遅いのではないか、というのが本日時点での筆者の印象だ。

まだ準備は万全ではない

軍事行動の準備も十分だとは言いがたい。1月6日付のワシントンポスト記事（Buildup Accelerates For Invasion of Iraq）によれば、現在、10万を超える地上兵力が展開されつつある。このなかには陸軍3～4師団、空挺師団、海兵隊師団、そして特殊部隊が含まれるという。

しかし、事前に予想されていたような20万人体制はまだ整っていない。単純に比較しても意味はないが、イラクの兵力は共和国軍8万、フセインの特別防衛隊1万5000、一般兵力3万と合計で10万を超える。もちろん装備を考えれば米国優位は動かないものの、米軍が自分より数において多い敵を相手に開戦する、という状況は想像しにくい。もちろん、先に空爆だけを始めておいて、後から地上戦の準備にかかっても十分間に合うだろうが、これまた米軍の伝統を考えるとふに落ちないシナリオである。

本気で対イラク戦を行うのであれば、下準備としてなすべきことはいくらでもある。たとえば米軍には、以下のようなオプションがある。

- ・湾岸での兵力を20万人規模に増強する。
- ・ディエゴガルシア島にステルス戦闘機を配備する。(航続距離を考えると、できるだけイラクに近い場所に置いておきたい)
- ・国内で予備役を招集する。(現時点ではまだ噂だけ)

将棋に喩えるならば現在は序盤戦。角道を開けて飛車先の歩をついて、銀が3段目当たりが上がったくらいといえようか。本格的な駒組みには程遠い。もちろんこのままでも戦いは始められる。双方の棋力の差を考えれば、先手が十分に勝てるだろう。しかし先手としては、これから銀を上げて、桂馬をはねて、角を好位置に動かして、それから歩を突き捨てて開戦しても悪くはない。先方は飛車角もなければ金銀も乏しい。こちらがいくら手を進めても、向こうは手待ちをするしかなく、先に攻めてくることはなさそうだ。だったら、**ゆっくり攻めた方がずっと安全に勝つことができる。**

しばらくは心理戦か

プロの将棋指しなら、こんな勝負でも一手でも早く終わらせようとするだろうが、米軍としては勝負を急ぐ理由がない。端歩を突くとか、王様を固めるとか、万全を期してから戦闘を起こせばよい。そのうちに、向こうが「まいりました」と言うかもしれない。というより、フセインがリビアあたりに亡命してくれるかもしれない。その瞬間に、イラクの脅威は(たとえ大量破壊兵器が残っていたとしても)、ゼロになる。プッシュにとっても、武力行使なしに目標が達成されるのなら、「平和裏に目標を達成した」と宣言できるので、悪い話ではない。

このように考えてみると、**対イラク武力行使の機は、まだ熟していない**のではないだろうか。米国側は、国連による査察の結果を待ちながら、ゆっくりと賭け金を釣り上げていくことができる。ゆえにイラク情勢はまだまだ心理戦が続くというのが、1月10日時点の筆者の印象だ。

さて、ここまで書いたところで、「北朝鮮がNPT脱退を宣言」というニュースが飛び込んできた。米国としては北朝鮮とは、「戦争も交渉もしたくない」腹だが、このチキンレースには付き合わざるを得ない。したがって、当分は二方面で心理戦が続くことになる。もっとも、**対北朝鮮の盤面は、ほとんど駒を動かさない「言葉だけの戦争」**である点には注意をしておいた方がいいだろう。

< From the Editor > 故郷の風景

年末は富山に帰省しました。新年を故郷で迎えるのは3年ぶりで、正月は好天に恵まれたし、1月2日には久々の雪景色も見られたし、なおかつ飛行機がちゃんと飛んで帰れたので、非常にラッキーでした。さて、富山で印象に残ったことを2点ほど。

まず田中耕一さん現象のすごいこと。田中さんが帰省した12月30日夕刻は、富山駅に500人が出迎えました。後で家族とクルマで市内に出かけた際に、筆者が「田中さんの実家の前を通ってくれ」と言ったところ、両親から「お正月はそっとしておいてあげなければ」と却下されてしまいました。郷里の誇りを思うことかくのごとくして、おそらく富山市中がこんな状態だったのではないのでしょうか。

もうひとつの話題は、大晦日の紅白歌合戦で中島みゆきが黒四ダム内のトンネルから中継で『地上の星』を歌ったこと。あれだけの放送器材を、この季節のかの地に持ち込んだだけでも「プロジェクトX」的な快挙で、駄目だったら別のダムで間に合わせるプランもあったそうです。しかし、全国の視聴者にはこのすごさが通じたかどうか。

「大晦日の午後11時に仕事を終えた中島みゆきさんは、タクシーか何かで下山して、12時には暖かいところで年越し蕎麦を食べてるだろう」、などという誤解がありそうで心配です。おそらく翌日のお雑煮も、スタッフや関西電力の職員の皆さんと一緒に食べたことと思います。この季節の北アルプスは、半端じゃないんですから。本当に。

編集者敬白

- 本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、日商岩井株式会社および株式会社日商岩井総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記までをお願いします。
〒135-8655 東京都港区台場 2-3-1 <http://www.niri.co.jp>
日商岩井総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)5520-2195 FAX:(03)5520-2183
E-MAIL: yoshizaki.tatsuhiko@nisshoiwai.com